

# 障スポ共に楽しんで



車いすバスケットボールを指導する県立医科大准教授の橋香織さん(中央)と阿見町阿見、鹿嶋米寿撮影

全国障害者スポーツ大会「障スポ」が今年、本県では初めて開催される。「いきいき茨城ゆめ大会」の愛称の下、10月に正式競技場、オーソーン競馬場から関係者の尽力が続く。

## 「見る」から「する」へ 普及や人材育成奮闘

車いすバスケット指導者 橋香織さん

年の瀬の平日夜、県立医科大の体育館(阿見町阿見)から、「キック」という音と、ホイッスルを吹く音が響いていた。学生たちが車いすに乗ってターンを繰り返すバスケットボールを追い、同大准教授の橋香織さん(46)がアドバイスを送っていた。

学生たちは健常者。卒業後、医療現場で働くことが多かった。多い学生に「障害の特性を理解し、障害者スポーツとは何かを学んでほしい」との願いから、2005年に活動が始まった。卒業生には働きながら指導者に就く人も出てきている。08年から指導する橋さんは「障害がある人もない人も一緒にできるのが魅力。互いに理解し合うツールとしてスポーツを持つ方が大きい」と

「大変」など、利用を減らされたことがある。そのたびに「他のスポーツに比べ、床に傷がつくわけではないし、スポーツをする以上、けがもある」と反論する。「知らない」といふのが多い。だが、

障害者自身も「スポーツは見てもいい」と考える傾向は、まさに根強い。「扉の向こうは何があるかわからない」。その扉は開けたい。「その扉を開けたい」。その扉を開けたい。仲間が生き残り、仲間として受け入れ、「スポーツが日々の生活の活力になっている人を何人も見ました。見るスポーツから、するスポーツへ。そのチャンスを手え続けたい。

10カ月後、全国障害者スポーツ大会が県内で初めて開催され、正式競技場での13競技が行われる。県民が関わりを持つチャンスが巡ってくる。

「多くの人に見ていただきたい。そして、体験していただきたい」。障害者スポーツは障害者だけがするスポーツでない。障害の存在を全く無視するのではなく、必要以上に障害者に配慮することをほなへ、障害者がある人もない人もみんなで楽しむ分業しむための工夫をすることがとても重要だ。

開催日が近づくと、準備が進み、盛りだくさんのおおむね盛り上がっていくのだらう。だが、その後の大切なこと。

障害者スポーツの拠点が増え、指導者が育つことを期待する。

「障害者がスポーツをし

たい」と願ったとき、誰もができる環境が整えられたい。「障害者がスポーツをやっている。すごい」という言葉がなみなり、「一緒にスポーツをやりたい」といふ声があふく。生まれ、当たり前になってほしい。(小池悠司)